

な言語を通じてであるから、詩人たちが真実を見わけ、それを説明することを目的としていると想像してはならない。」についてはたとえは C. Day Lewis の “The Poet's Way of Knowledge” など読みあわせてみる必要がある。ルイスによれば詩もまた知識なのである。

沈黙における言葉

大谷大学助教授 伊 東 慧 明

『沈黙の世界』の著者、マックス・ピカートは、現代を「沈黙なき世界」ととらえて、「何ものといえども、沈黙の喪失ほど人間の本質を変えたものはなかった。乃至、沈黙を失った人間は、沈黙とともに固有の一つの性格を失っただけではない。人間は、そのために自己の構造全体において変質してしまったのである」(佐野利勝訳)という。たしかに現代には、有史以来の喧嘩に加えて、現代特有の騒音が充滿している。現代人は、沈黙とともに人間における人間性をも喪失したかのようなのである。だから「何よりも、我々は、現代世界の騒音を離れて、沈黙のなかに身を置かねばならない」と提言されるのである。

しかし、だからといって我々は、沈黙を求めるために、現代の世界から隠遁を企てるのであってはならない。そのようなことは、現代人である我々には、許されないことである。即ち、我々

は、いつ、どこで、どのようにあろうとも、沈黙のかかわりを失わぬ言葉——、そのような意味での「沈黙における言葉」をこそ求めねばならぬのである。そこで、私は、いまその答えを、親鸞の語りかけに聞くことにしたい、と思う。

「深い沈黙とのかかわりから生れ、つねに沈黙とのかかわりを失わない言葉は、何か」と問えば、親鸞は、「それは、本願の名号、すなわち南無阿弥陀仏である」と答えるであろう。即ち歎異抄に「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」というところの「念仏」である。では、親鸞は、いかにして「ただ念仏のみ」と断定するにいたったのであろうか。換言すれば、「本願の名号」は、何を機縁として自らを廻向表現し、何によって自らの真実であることを証するものであろうか。

まず、浄土教興起の機縁として想起されるのは、観無量寿経所説の「王舎城の悲劇」である。それは、悪逆非道の事件をとおして、全ゆる人間が内に秘めて持つ宗教性を明らかにするのとともに、人間の実存に、宗教の真実を証するものである。したがって、それは、ただ単に、曾ってインドに起った一事件に過ぎないのではない。親鸞は、その悲劇の中に、自己の人生をみたのである。

さて、経説によれば、実子の阿闍世によって深宮に幽閉された韋提希は、愁憂憔悴して、改めて釈尊の教えを乞うた、とある。ところが、その所念を知って王宮に現われたもうた釈尊の尊容を

前にしたとき、韋提希は、瓔珞を絶ち五体投地し号泣して「世尊、我宿何罪生此惡子。世尊、復有何等因縁與提婆達多共爲眷屬」といったという。それは、誰よりも、かくいう韋提希自身が驚嘆し惶怖するところの愚痴と怨訴とであった。

しかし、やがて感情の静まるに従つて、韋提希は「我当往生、不樂閻浮提濁惡世」といい、「唯願仏日、教我觀於清淨業處」と求めるのであるが、それに応じて釈尊は、眉間の光を放つて、その光明中に十方の淨土を示現された。すると、それをみた韋提希は、特に「我今樂生極樂世界阿彌陀仏所」と請願する。そしてそのとき、はじめて釈尊は微笑し、やがて「汝今知不、阿彌陀仏去此不遠」と言説されたのである。

この経説によつて明らかとなり、釈尊は、王宮に出現されて以来、ただ沈黙をたまちながら、韋提希の愚痴と怨訴とを受けとめておられたのであった。そこでは、釈尊の沈黙と韋提希の苦惱とは、あたかも一体であるかのようなのである。けれども省りみれば、韋提希は、ブツダを前にしてであつたればこそ、愚痴をいい怨訴して自己の自性を知ることができたのであった。そこでは、ブツダの智慧ある慈悲が韋提希を包摂しているのである。

このような、釈尊の大悲の光明と、韋提希の愚痴の無明との出会いを「沈黙における出会い」というならば、この沈黙は、廻心という宗教体験の成り立つ場、即ち転生の場としての沈黙である、ということができよう。親鸞が和讃して「思徳広大釈迦如来、韋提夫人に勸してぞ、光台現国のそのなかに、安樂世界をえらばしむ」というように、韋提希は、釈尊に導かれて、アミダの

大悲の本願にめぐめていくのである。

ところで、アミダの本願を正しく説く經典は大無量壽經であるが、正信念仏偈に「法蔵菩薩因位時、在世自在王仏所、觀見諸仏淨土因、国土人天之善惡、建立無上殊勝願、超発希有大弘誓、五劫思惟之撰受、重誓名声聞十方」とあるとおり、この世自在王仏と法蔵菩薩の對話において注意すべきことは、その発願のとき、五劫の思惟、即ち甚深の沈黙があつたということである。

法蔵菩薩は、世自在王仏の光明海中に、諸仏淨土の因、国土人天の善惡を觀見し、衆生の閻閻界を見きわめて、自らの包まれてある仏想念界の言葉、即ち南無阿彌陀仏をもつて、自らの志願を表現し成就する言葉として選択されたのである。これを親鸞は、「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫とときたれど、塵點久遠劫よりも、ひさしき仏とみえたもう。南無不可思議光仏、饑王仏のみもとにて、十方淨土のなかりぞ、本願選択撰取する」というが、ここに語られるように、五劫思惟の沈黙は、はじめなき名号の世界にはじめをひろくものである。即ち、そのとき、仏仏相念界の名号が、はじめて「本願の名号」となるのである。

しかしながら、釈尊は、その「本願の名号」が、真実にこの人生に廻向表現されて、「名声聞十方」の誓願が果遂されるために、換言すれば、全衆生が、沈黙の彼岸より等流する名声を正しく聞いて「聞其名号信心歡喜乃至一念——」の信念を確立するため、いま一つの経説を用意せられたのであった。それが、阿彌陀經である。

従来、この經典が、釈尊の平生の居所である祇園精舎で説かれ

たということ、この經の説意が、我々の人生に密接することを示すのである、と解されている。それとともに我々は、親鸞が、この經典は「大乘修多羅の中の無問自説の經なり」といい「この經を説きたまいしに、如来に問いたてまつる人もなし、これ即ち釈尊出世の本懐をあらわさんと思召す」と了解された点を見逃がしてはならない。ここでは、「ただ念仏のみ」と説く釈尊の説法は、その仏説に聞き入る舍利弗の静かな沈黙と、あたかも重なり合っているかのようである。

親鸞は「如来に問いたてまつる人もなし」というのであるが、舍利弗の無問の沈黙は、本願の名号が説かれるのを聞いて、自力の無効（難信の自迷）と仏仏相念の世界（天行の歴史）にうなずく、深いうなずきの沈黙である、ということができよう。

さて、はじめに、現代の世界は「沈黙なき世界である」という問題が提起されている、と述べた。その場合、失われた沈黙の中でも最も重大な問題は、神の沈黙をいうのであろうか。とすれば、我々は、現代に於てこそ特に、神の宗教と開神の宗教、即ち神とブツダとの同異を明瞭にするとともに、「沈黙における言葉とは、本願の名号である」という親鸞の教え——、この業縁の人生のただ中に身をおきながら「ただ念仏のみ」と断定した親鸞の教え——、の現代的意義を、改めて深く学ばねばならぬ、と思う。

(四二・一一・一九)

ルソオ教育論における契約の理念

大谷大学助教授 太 田 祐 周

ルソオにおける自然教育の主張は、生徒一人に教師一人と云う最少限の教育的人間関係の要請と共に、成立したと云うことができる。何故なら彼の自然思想が、個人の絶対的独立を求める徹底した社会批判である一方、教育が、教育者と被教育者の関係なくしては成り立たない社会的活動であるからである。かくしてルソオの自然教育は、それが教育である限り教育者と被教育者の社会的関係を認めつつも、他方それが自然的なものである限りこの社会関係をその最低限にまで縮小せざるを得ないわけである。

かように社会関係から引き離して育てられる者は、一人の共同学習者も持たない。けれども彼を殊更社会関係から引き離すことによつて彼の自然的成長を確保せんとする教師と云う、唯一人の共同生活者があると云わねばなるまい。従つてこの教育の自然性よりも社会性を強調するならば、教師は生徒にとつて、教育者であるにも優つて先ず共同生活者であろう。何故なら共同生活が最も基礎的な社会関係であるに對し、教育はこの社会的機能の特に意識され計画された一面にすぎないからである。

差し当つて次の文が考慮されよう。「私は唯だ世間共通の意見に反して、教師は若くなくてははいけない、賢い人間にして若く